

特別編

社会に貢献するくふう

私たちは働いて報酬を得て、それぞれの生活を営んでいます。しかし、働くことには、報酬以上にもっと大きな意味があります。社会に出て、お客様、上司、先輩、雇用主、取引先、下請事業者、関係機関…など、多くの人と交わり、「ありがとう」と言ってもらえる関係を築くことで、多くを学び、自分を高めていくことができ、会社の中に自分の仕事を残すことができるからです。先人たちは、仕事を通じてどのように社会とかかわってきたのか、これまでの探訪記の取材からそれをまとめました。

1 自分の生涯の仕事を決める

この世界に生まれて、どんな仕事に取り組むかは、1人ひとりにとって大きな問題です。多くの人は、何年も、時には何十年もかかって、自分のすすむべき道を見つけるのですが、若い頃から自分のすすむべき道がはっきりと見えていた人たちもいるようです。

◆安田善次郎翁（1838-1921）は13歳の時に、御用金を持参した両替商の手代に、藩の勘定奉行が丁重に頭を下げるのを見て、自分も「せんりょうぶげんしゃ千両分限者」になろうと決心しました。親にも告げずに富山から江戸に出て、奉公し、両替商となり、やがて金融界に君臨し、安田財閥をつくり上げました。

◆豊田佐吉翁（1867-1930）は少年時代から、発明・発見によって世の中の役に立ちたいと考えていました。むさぼるように本

を読み、東京に出て横須賀造船所でさまざまな機械を見て刺激を受け、母が機織りするのを見て、機織機の改良を目指し、自動織機を完成させて、この国の紡績業の発展に貢献しました。



豊田佐吉発明の木製人力織機

2 困難を克服し

自分の仕事を発見する

困難に直面し、努力を積み重ねて、それを克服したことで、自分自身の道を発見したという先人も少なくありません。

◆大出権四郎翁（久保田権四郎／1870-1959）の両親は、明治はじめの地租改正に

よって重い税負担に苦しみました。村祭りに我が子に持たせる小銭がなくて泣き伏す母親を見て、権四郎翁は西洋鍛冶屋になって両親をラクにさせると決心し、14歳で因島から大阪に渡って鋳物業を開業しました。それが今日のクボタのはじまりです。

◆早川徳次翁（1893-1980）は、まだ乳飲み子だった頃に養子に出され、養母が亡くなると、養父の後添えとして入った女性から過酷な扱いを受けました。十分な食事も与えられないまま、朝早くから夜遅くまでマッチ箱にラベルを貼る内職仕事を強いられたといいます。その境遇から這い上がって飾り職人となり、シャープペンシルを発明。自分で事業を興しましたが、関東大震災でその事業も失います。大阪に渡って再起を



早川徳次発明のシャープペンシル

期し、今日のシャープにつながる会社を興し、ラジオ、テレビ、電卓を次々と世に送り出した。

3 世の中の課題に対応して

事業を興す

自ら事業を興した人の中で最も多いのは、世の中の課題に直面し、その解決が自

分の使命だと感じて事業を興した人たちです。

◆キリスト教徒だった賀川豊彦翁（1888-1960）は、貧民窟に入って神の道を説き、弱者を救済しようと思いました。しかし、多くの困窮者を救うには、労働運動、農民運動、協同組合運動が必要と考え、それらの運動の先頭に立ち、やがて翁の指導とアドバイスによって、神戸と灘に生活協同組合が生まれました。これが今日のコープこうべにつながっています。

◆大分市で理美容店ビューティフルライフを経営する田中晃一さんは、自分から理美容院に来られない人たちのために、移動理美容車を購入し、病院や高齢者施設、福祉施設を回りました。その後「日本福祉理美容安全協会」を組織して理美容師の感染症防止の方法を探り、その普及活動を行っています。



ビューティフルライフの移動理美容車の内部

◆刑務所や少年院を出た仮出所者は、保護司による面談を月2回受けます。「しかし、それだけで彼らを更生させることは不可能

に近い」と考えた保護司の副島勲さんは、出所者に仕事と住まいと教育を提供するために、ヒューマンハーバーという会社を設立しました。企業から産業廃棄物を引き取り、出所者にそれを分別させることで収益を得、その収益で出所者に仕事と住まいと教育を提供しています。出所者たちは半年か1年でそこを卒業し、一般社会に巣立っていきます。

◆郊外にスーパーができて、みんなが車で買い物に出かけ、商店街がシャッター通りになると、車に乗れない高齢者は買い物難民になりました。そんな高齢者のために、住友達さんは「移動スーパー・とくし丸」の事業をはじめました。地域スーパーから委託された商品を移動販売車に積み、高齢者宅まで販売に出向くサービスで、いまでは全国各地に1000台の移動販売車が活動しています。

4 就労困難者の雇用を創出する

事業が軌道に乗ると、それを継続するために人を雇用する必要性が生まれます。雇用することは、人に報酬を提供し、社会参加の場を提供することでもあり、障害など就労困難な事情を抱えた人たちにとっては、そのこと自体が社会貢献となります。

◆ガソリンスタンドを経営する油藤商事の青山裕史さんは、中学校の先生から頼まれて、不登校で社会への適応が難しい子供を預かることにしました。3K職場で油まみ

れになって働きながら、「ありがとうございました」とお客様に頭を下げることで、引きこもってしまった子供たちは社会性を身につけ、社会で生きていく自信を得て巣立っていきます。現在預かっている子は4人目だそうです。

◆システム関連事業請負業のアイエスエフネットの2700人の従業員のうち1000人は、元はニート、フリーター、ワーキングプアなどの就労困難者たちです。渡邊幸義社長が創業当初にIT技術経験者を募集したところ、十分な人数が集まらず、応募者の態度にも問題があると感じ、未経験者を採用して採用後に資格取得させることにしました。すると障害者など就労困難者のほうが高い意欲を持っていることがわかり、以来、ニート、フリーター、障害者、引きこもり、シニア…であることを理由に不合格にしないと決めているそうです。

◆ヤマサ醤油の当主・濱口梧陵翁（1820-1885）は、安政南海津波で、稲むらに火をつけて避難路を照らし、村人たちを高台に避難させました。しかし、村人たちの家も



濱口梧陵が村人たちに築かせた広村堤防

田畑も舟も漁具も、津波で流失し、村には生きていくすべが残っていません。そこで梧陵翁は、村に堤防を築くことで村人たちに仕事を提供することにしました。延べ5万6000人分の工賃は、ヤマサ醤油が7代にわたって築いた資産から出たといわれます。

5 地域社会に奉仕する

企業にとって、目の前のお客様が、いつまでもお客様でいてくれるという保証はありません。お客様はやがて離れていくかもしれません、そうすると、広い世間の中から新たなお客様との結びつきをつくる必要があります。そこで、世間からの支持を広げるために、多くの企業は地域社会への奉仕活動を行っています。

◆新聞販売店のASA栃木中央では、購読客との良好な関係をつくり、地域から信頼される新聞販売店を目指して、毎月1回、道路の清掃奉仕活動を実施。さらに古紙を回収してロールペーパーと交換。収益金を緑化基金に寄付しています。ASA栃木中央からはじまったこの活動は、後に栃木県の新聞販売店全体で実施されることになりました。

◆阪神淡路大震災が起こったとき、愛知県安城市の七福醸造の犬塚敦統社長は、神戸市役所に「被災者を救援に行きたい」と申し入れ、食材と道具を神戸まで運び、味噌汁、うどん、豚汁をつくって避難所に配りました。1日500食。その後3600食、8000

食と増加していきました。社員の一部を救援活動に割いたことで、生産は一時低下しましたが、その後は社員のやる気が向上し、業績はさらに向上したといえます。

◆オフィス用品販売業、カスタネットの植木力社長は、発展途上地域の子供たちを応援するために、全国から集めた中古文具をカンボジアに送り、自らもカンボジアに渡って学校を視察、学校建設資金を寄贈しました。そのことがメディアで報じられ、やがて「お宅のような社会貢献をしている会社からオフィス家具を買いたい」という注文が入るようになったといえます。

◆宮田運輸のトラックがバイクと接触して死亡事故を起こしました。被害者家族と、加害者である自社ドライバーの家族が大きな苦しみ突き落とされるのを見て、宮田博文社長は、トラックなど世の中から消えてしまえ…と思ったそうです。しかし、ある会社で従業員の子供が書いた安全標語を見たことがきっかけとなり、ドライバーの子供たちに絵を描いてもらい、それをトラックに貼ることにしました。以来、同社の



宮田運輸のトラックに描かれた子供たちの絵

トラックは、子供たちの絵と「パパ、運転、がんばって」「いつも、安全運転、ありがとう」などの子供たちの文字を掲げながら、走っています。

6 次世代を育成する

継続的な地域貢献事業として、教育分野でも支援活動が行われています。

◆大量の電気、大量の灯油を消費して大きな環境負荷を発生させているリコー福井事業所では、社会的責任の一環として「環境経営」を推進。CO₂排出量削減、ゴミゼロに向けた改善活動のほか、工場構内にビオトープをつくり、工場見学に訪れた子供たちにメダカやザリガニと遊ばせ、環境担当マネジャーが「自然教室」を開講。人間が環境を破壊していることを自覚し、省エネ・省資源に取り組むことの大切さを説いています。

◆清川メッキ工業では、お父さんやお母さんが会社でどんな仕事をしているのかを知ってもらうために、社員の家族を対象に「めっき教室」を開講。1人ひとり銅板に



清川メッキ工業のめっき教室

絵を描き、絵の部分だけ切り取り、ニッケルめっきと金めっきをして、キーホルダーをつくります。また「ウチでもめっき教室を開いてほしい」という各地の学校からの要望に応じて、入社2～3年目の若い社員が学校に出向いて、めっき教室の講師役を務めています。

◆シャープの創業者・早川徳次翁（前出）は、尋常小学校に1年通っただけで、あとは苦勞して独学で知識・技術を身につけました。徳次翁はその体験から、若いうちにきちんと勉学に励むことの大切さを痛感し、自社工場の従業員のために1937（昭和12）年、私立早川商工青年学校を設立しました。シャープは後に社是として「信用・資本・奉仕・人材・取引先」の「5つの蓄積」を掲げましたが、早川商工青年学校の設立は、その中の「人材の蓄積」を目指したものでした。

◆ニッタグループの創業者・新田長次郎翁（1857-1936）は、地元の警察署長からの要請に応じて、貧困で小学校に行けなかった少年少女のために、大阪市内に有隣尋常小学校を設立しました。また、郷里の松山高等商業学校（現松山大学）の創立のために、大阪市内に所有していた土地を売却して30万円を寄付しました。ただし、金は出すが経営には一切口を出さず、学校名や学校行事に「新田」の名を出すことも断りました。さらに、教育を受けた人材を囲い込むためではないことを示すために、卒業生を会社

に採用することも断り、会社創立100周年以降ようやくその禁が解かれています。

7 文化を発信する

事業活動によって大きな蓄積をつくった事業家たちは、それを社会に還元するためにさまざまな文化事業を行っています。

◆石見銀山の町、島根県太田市大森町は、銀山の閉山後、過疎の町になっていました。この町の旧家に生まれた義肢装具製作会社、中村ブレイスの創業者・中村俊郎さんは、この町を再び世界に誇れる町にするために、町並みの保存に力を注ぎ、さらに石見銀山の世界遺産登録にも力を尽くして2007年に世界遺産登録が実現。多くの観光客がこの町を訪れるようになりました。

◆島精機製作所の創業者・島正博さんが開発した全自動手袋編み機1号機は、高く評価されたにもかかわらず、加工技術不足で故障が多く、思うように売れませんでした。

た。莫大な開発投資の金利が払えず、明日が手形の締め切りという日の晩、見知らぬ男が訪ねてきて、机の上にポンと100万円の札束を置き、「これを用立ててくれ。払えるようになったら返してくれればいい」と言いました。島さんの才能を高く評価していた事業家でした。以来、島さんは世の中の人々のために身を捧げようと決意。その一環として、和歌山市内に「フュージョンミュージアム」を開設して、子供たちに創意くふうの大切さを伝えています。



島精機製作所のフュージョンミュージアム

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中